

戦前の同志社と台湾留学生

阪 口 直 樹

1. はじめに アジア留学生と同志社の国際主義

同志社今出川キャンパスのハリス理化学館西横に、最近整備されたばかりの小さな中庭があり、そのかたわらに尹東柱の詩碑がそっと佇んでいる。尹東柱は、かつて1942年10月に同志社大学文学部文化学科英語英文学専攻に選科生として入学し、同志社在学中の43年7月14日、京都府下鴨警察署に治安維持法違反の理由で検挙され、45年2月16日、福岡刑務所にて満27才の若さで獄死した朝鮮の民族詩人である。1995年3月11日に放映されたNHKスペシャル「空と風と星と詩 尹東柱・日本統治下の青春と詩」は、戦争責任問題をめぐって微妙な関係が続いてきた日韓関係の見直し作業が、新たな段階に入ったことを告げていた。同年2月16日 尹東柱獄死50年の命日には、同志社において前述の尹東柱詩碑の除幕式が盛大に行われ、その後尹東柱の記念文集『星うたう詩人 尹東柱の詩と研究』（東柱詩碑建立委員会編 三五館 1997）も出版されることになった（写真1）。



写真1：今出川キャンパスの尹東柱詩碑

また1998年11月30日付け『京都新聞』に「韓国の天才詩人 京に再生」との見出しで同志社出身の韓国の詩人・鄭芝溶が、70年ぶりに再評価され始めたことが紹介されている。鄭芝溶は15才から詩作を始めているが、1923年に同志社大学予科に入り、1929年に同志社大学英文科を卒業した。戦後はソウル梨花女子専門学校などで教鞭をとりながら、創作活動に励んだが、1953年頃、朝鮮戦争で消息を絶った。韓国では鄭芝溶の詩人としての存在は、尹東柱をはるかにしのぐものだという。鄭芝溶は同志社大学在学中から文学雑誌に20近くの日本語の詩を発表し、北原白秋らもロマン派の若手詩人としてその才能に注目したというが、京都新聞の記事で紹介された「雪」は、冬の京都を巧みな日本語で表現している。

雪

雪の中をかきちらして / 紅の木の実がでてきた / 指さきが幸福さうに
氷っている / 口にあてて / ほうほうと息を吹く

ところで、尹東柱詩碑建立の翌年に、戦前の同志社に関する一つの話が新聞紙上ににぎわした。それはかつて戦前の一時期、同志社に在籍しながらも卒業できなかった11名の留学生（朝鮮留学生10名、台湾留学生1名）に対して卒業資格（特別学位記）が与えられたことである。当時の学内報は授与式の様子を以下のように紹介している。

戦争中にもかかわらず、まだ同志社には自由が息づいていたと、遠来の先輩たちは語った。朝鮮籍、台湾籍の自分たちにとって、戦争や差別から逃れる空間だったと。だがキャンパスに軍国主義の蚕食は続く。詩人尹東柱の隣室に下宿して共に本学に通った金一龍さんからは、官憲に奪われた友人への断腸の思いが吐露された。そうしたそれぞれの思いを抱いて、9人の先輩たちが「特別学位」を受けるために韓国、アメリカ、台湾から集まった。第2次世界大戦中、無念の思いで同志社を去らねばならなかった人々である。11月16日、式典に列席したコリアクラブのメンバーからは、「今日の母校を誇りに思う」との声が

聞かれた。(『同志社大学広報』NO.296 1996.11.30)

これら一連の“さわやかな話題”は、同志社が標榜する“新島の良心”を象徴するものとして注目もされ、また歓迎もされたのである。それは、日本が戦後50年を経過し、かつての歴史の見直しが求められていた時期であって、これら一連の出来事も、同志社における一連の“戦後処理”としての意味が与えられたといえなくもない。

だが私は、この問題を同志社における“国際主義”の一つの段階として考えてみたい。同志社は創立以来、新島襄の「人格主義、デモクラシー、インターナショナリズム及び男女平等主義」を四大主義として標榜してきたが、なかでも国際主義はそのなかの重要な柱として位置づけられてきた。たとえば、栄光館、アーモスト館、ハワイ寮など昭和期同志社の象徴的な建築物は、すべてアメリカとのかかわり、とりわけ新島襄の母校アーモスト大学、同志社創立以来の協力者であったアメリカン・ボード、さらにこの両者を中心にして広がった日米間の人的交流の結果であった。その歴史からいえば、同志社の国際主義とはアメリカとの交流と同義であると理解されてきたと言えるかも知れない。もっとも、『同志社百年史 通史篇二』(同志社社史史料編集所編1979年11月1009頁)には、かつて中国の「燕京大学との交流が教職員有志によって検討されていた」り、「ハワイ、中国や朝鮮、台湾から来た多くの青年が同志社諸学校に学んで」いた事実などが指摘されているが、単なる歴史のエピソードとして扱われているにすぎない。だから戦後50年に持ち上がった一連の話題は、日米という枠を超えた“国際主義”の可能性を予感させるものとして意義は大きいと思う。

ところで、授与された「特別学位記」について、私には少し釈然としない感じが残った。それは学籍簿による卒業証書の授与ではなくて、あくまで「本人の申請」と「本人の希望する氏名」による変則的措置であり、だとすれば11名以外にどれだけ資格を有する対象者がいるのだろうか、あるいは朝鮮留学生のほかに中国や台湾留學生がどれくらいいるのだろうかなどといった疑問であった。ただこれらの疑問は、私のなかでは素朴な段階にとどまり、台湾留學生の実態分析というだけそれだ研究動機にまで上昇することはなかった。

その後1998年正月、私は台北の中央研究院で開催された“文芸理論と通俗文化”をテーマとする国際学会に参加して報告を行ったが、朝食の際に一人の老研究者を紹介された。頂いた名刺には林宗義とあり、「林茂生愛郷文化基金会董事長」「世界心理衛生協会名誉総裁」などいくつかのいかめしい肩書きが連ねてあった。私が同志社大学の関係者であると自己紹介をすると、自分の父親・林茂生が同志社出身であること、かつて台湾から多くの留学生が同志社に学んだこと、留学生の実態をぜ



写真2：林茂生の思い出を語る林宗義（1998.1台北）

ひ明らかにしてほしい等々を情熱を込めて語られたのである（写真2）。帰国後、仕事に追われる中で時間が経過していったが、今回幸いにも同志社の関係諸機関の協力で戦前の学籍簿を閲覧する機会を得ることができた。本稿が、台湾を中心としたアジア留学生の実像を再構成する作業を通して、戦前の同志社における国際主義の意義を問い直すことができれば幸いである。

2. 同志社におけるアジア留学生

台湾留学生第1号として、様々な困難を克服して学業を修め、ついに同志社大学助教授にまで登りつめた周再賜は、後に続く大量のアジアや台湾の留学生の先鞭となったといわれているが、戦前の同志社における留学生の実態について、その全体的な資料はまだ整備されていない。水野直樹は、京都における朝鮮人留学生について、次のような比較的詳細なデータを提示している。

朝鮮人留学生が京都で学び始めたのは、1900年前後からと思われる。京都法政専門学校（後の立命館大学）の1902年の卒業生名簿に朝鮮人

の名前が見られる。

1915年末京都在住の朝鮮人学生（中学生以上）は28人、1920年には47人、25年には214人に増えている。朝鮮人学生の3, 4割は「苦学生」であったとされており、異郷での勉学生活は決して楽なものではなかったが、京都に学ぶ朝鮮人学生はその後も増え続け、35年353人、39年1274人となり、42年にはピークを迎えて2096人となった。43年には1769人に減少し、その後も学徒動員などの影響でさらにその数が減った。つまり、尹東柱が同志社に学んでいた1942年前後が朝鮮人学生の最も多い時期だったのである。その年、日本全体では2万9427人の朝鮮人学生がいたが、半数以上の1万7000人は東京に集中していた。京都は大阪に次いで3番目である。大学生だけで見ると、合計2788人のうち、東京の2417人が圧倒的で、次いで京都が181人（官立69人、私立112人）、福岡36人などとなっている。（「尹東柱と京都在住朝鮮人」上掲『星うたう詩人 尹東柱の詩と研究』131頁）

これによって、「京都に在住した朝鮮人留学生数」の概略的な流れを把握することができるが、同志社における傾向についてはどうすればわかるだろうか。ちなみに手元にある同志社の同窓会名簿である『同志社校友会便覧』（同志社校友会発行 昭和14年11月号）を利用できないかをまず考えてみる。同便覧には「会員卒業・入会年別」と「会員名簿」の項目を立てて、網羅的に校友会員（卒業生）を収録しているが、その「氏名と現住所」を手がかりに台湾の初期留学生をリストしてみる。

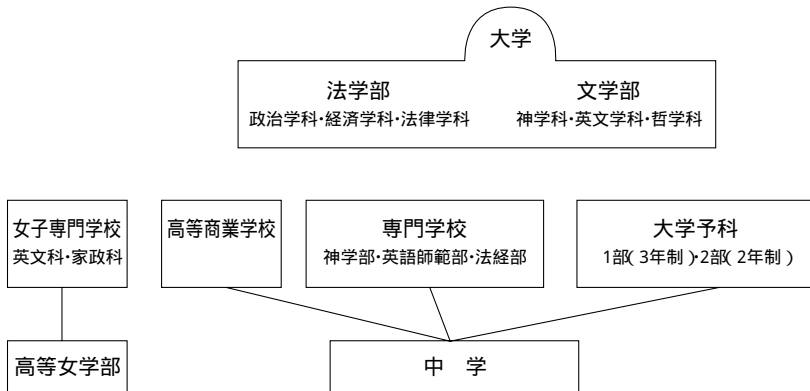
まず最初に出てくるのが周再賜（普通学校1909年）で、次いで林茂生（普通学校1910年）、寥行生（普通学校1911年）、趙天慈（普通学校1912年）と続き、その後は一気に増加の傾向をみせる。すなわち、1913年には寥温仁（普通学校）が、1914年に張翼遠、吳可足、李瑞雲、李育伯（いずれも普通学校）など、1915年には郭馬西、李明家、劉青雲（いずれも普通学校）と続き、周再賜はこの年大学神学部を卒業している。

ところでこうした同窓会名簿に頼ってリストを作成する作業は、まもなく行き詰まってしまうことになる。その理由は、現住所や姓名によって国別

(国籍)を確定できないことにある。姓について見ても、中国・朝鮮・日本・台湾で共用されるものもあるし、朝鮮に至っては創氏改名が強制されたことによって、日本の姓名が使用されている場合も多いからである。もう一つは、留学生の特徴は転学・退学・除籍のケースがきわめて多いことにあり、従って留学生の実態をより正確に把握するためには卒業生名簿ではなくて、入学者のリストがどうしても必要なのである。

そこで、私は同志社に保管されている学籍名簿の閲覧を試みることにしたが、幸い関係部局の配慮を得て、すべての学籍簿を直接調査することができた。学籍簿には、学生の 氏名(原氏名を含む)、生年月日、地域(本籍地と現住所)、所属学部、入学・卒業年度、出身校、成績が記載されており、これによって留学生の入学・卒業状況と、国別(国籍)を確定できることになる。

現在の学校法人同志社は、同志社大学のほかに、同志社女子大学、いわゆる5中高(同志社中学、同志社高校、同志社香里中学・高校、同志社女子中学・高校、同志社国際中学・高校)と幼稚園を擁しているが、1875年同志社英学校が設立されて以後、百数十年の歴史のなかでは新增設や統廃合を重ねながら複雑な沿革の過程を歩んできている。今参考までに、1932年の「同志社諸学校系統図」を示してみる。



このうち、中学と女子専門学校・高等女学部を除いた「学籍簿」が、大学の管理下にあるので、大学、大学予科、専門学校、高等商業学校を一括して調査の対象とし、まずそこから着手することにした。その際に 国別の判定については、学籍簿に記載されている本籍地と氏名による、 卒業者ではなくて入学者全員とする、 対象時期は1945年までとする、 移動・再入学などはそのまま加えて延べ人数とする、 という基準を立てて作業を進めた（戦前に朝鮮と台湾は日本の植民地であり、外国留学生ではなかったが、朝鮮・台湾を中国と同じくそれぞれの国別の留学生として扱う）。

3. 同志社大学学籍簿による国別留学生総数について

調査の結果、留学生総数は465名で、その内訳は中国12名（2.6%）、朝鮮325名（69.9%）、台湾126名（27.1%）であることがわかった。それら国別間の比率を見ると、朝鮮が圧倒的に多数を占め、逆に中国は極めて少数であることがわかる（図1）。さらに年次別の動向は図2と表1によって示されるが、朝鮮と台湾を対比してみれば、1929年までは両者がほぼ拮抗関係にあった（朝鮮31：台湾39）が、30年代に入ると両者のバランスはくずれ、朝鮮留学生の数が激増の一途をたどっている。つまり朝鮮留学生は、ある一定の時期から急激に増加するのに対して、台湾留学生の場合は早期からコンスタン

図1：同志社大学における留学生

統計465名（中国12名、朝鮮325名、台湾126名）

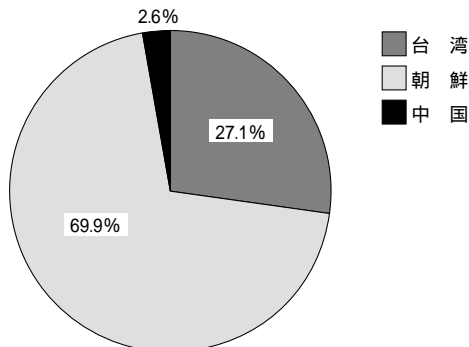


図 2：同志社大学における留学生の推移

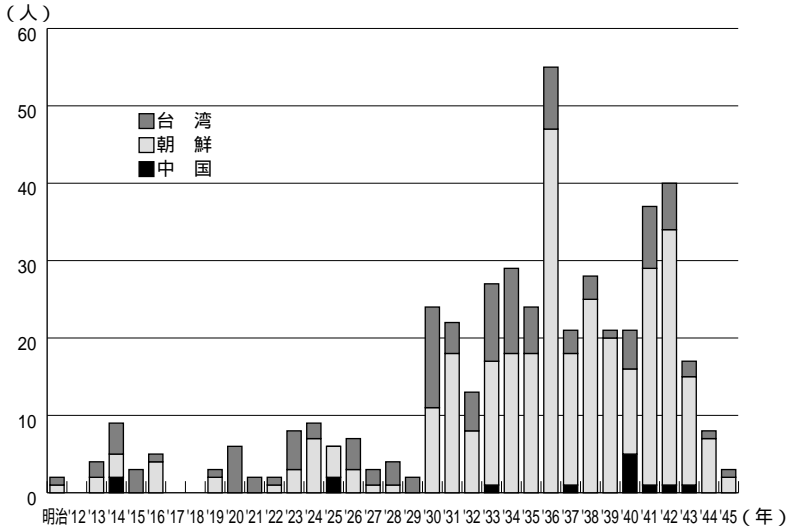


表 1：同志社大学における年度別留學生数

	明治	1912	1913	1914	1915	1916	1917	1918	1919	1920	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928
中国	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0
朝鮮	1	0	2	3	0	4	0	0	2	0	0	1	3	7	4	3	1	1
台湾	1	0	2	4	3	1	0	0	1	6	2	1	5	2	0	4	2	3

	1929	1930	1931	1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938	1939	1940	1941	1942	1943	1944	1945	合計
中国	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	5	1	1	1	0	0	14
朝鮮	0	11	18	8	16	18	18	47	17	25	20	11	28	33	14	7	2	325
台湾	2	13	4	5	10	11	6	8	3	3	1	5	8	6	2	1	1	126

トに、また比較的均等に分布しており継続性が高いことが読みとれる。

4．大学（専門学校等を含む）の所属学部の分布について

つぎに、留学生の所属学部（学科）等で、特徴的な傾向を見てみる。

学部別で見ると、いちばん多いのは法学関係（政治学科・法律学科など）で計97名（朝鮮56名、台湾35名、中国6名）を数え、経済関係（経済学科など）の所属がそれに次ぎ、計43名（朝鮮33名、台湾7、中国3名）であ

り、さらに文学部（英文学科・哲学科・英語師範部など）は計39名（朝鮮27名、台湾11名、中国1名）ということになるが、国別による特殊事情を認めることができない。これに対して、国別によって大きな差を生じているのは以下の3点である。

神学関係留学生の傾向

その一つは神学関係（神学部・神学科など）の入学数である。トータルの人数を数えると44名となるが、そのうち朝鮮は37名（84.0%）で絶対的多数を占めており、それに比べて台湾は5名（11.4%）、中国は2名（4.5%）で、朝鮮と神学関係とは極めて密接で、逆に台湾・中国と神学関係について関係はそれほど強くないことが読みとれる。台湾留学生の絶対数と比率が小さい点について、私は意外感を持ったが、関係者の証言をとると、朝鮮のキリスト教は、同志社と同じ組合派教会に属したものが多かったために、牧師養成のために同志社神学部（科）へ留学するケースが多かったが、台湾は長老教の影響が強く、そのために牧師養成のためには、長老教系列の日本神学校や明治学院などに留学するか、台湾の台南や台北の神学校・神学院に入るケースが多かったという。もっとも長老教と組合派には敵対的關係はなかったから、別に阻害要因となったわけではなさそうであるが、ちなみに長老教の影響下にあった長老教中学や淡水中学の卒業後の進路を見ると、日本神学校に留学した生徒が多かったことが確認できる。

予科入学生の傾向

つぎに予科入学生にしぼって見てみると、ここにも興味深い事実がある。それは予科の入学者が135名にものぼり、全体の29%を占めていることである。その内訳では、1部（3年制）が25名、2部（2年制）が110名で、2部所属が圧倒的となる。また国別の分布はどうかと見れば、朝鮮が101名（74.8%）、台湾が32名（23.7%）、中国は2名（1.5%）となる。つまり留学生数総数において朝鮮の比率が高いのは、朝鮮留学生に予科入学者数が多かったということと結びついている。

「1894年の「高等学校令」によって、第一(東京)、第二(仙台)、第三(京都)、

第四(金沢)、第五(熊本)高等学校(一高、二高等などと略称)が登場した際には、4年制の専門学科を主とし、同時に将来帝国大学に入学する者のための3年制の予科を設けた」(平凡社『世界大百科事典』)ことと、朝鮮の予科入学生が異常に突出していることを重ね合わせると、朝鮮留学生の多くが同志社以外の高等教育機関(大学)に進学する目的を持っていたと考えることができるかもしれない。

高等商業学校留学生の傾向

今度は高等商業学校(高等商業部の後身)を見てみよう。ここでは合計77名の入学者を数えるが、朝鮮が33名(42.8%)、台湾が43名(55.8%)、それに対して中国は1名(1.2%)となり、比率的に言えば台湾留学生の高さが目立っている。

1922年に同志社専門学校に神学部と並んで高等商業部が設置されたが、まもなく第1次世界大戦の好景気もあって人気が集まり、定員も800名へと増加させるなど充実が計られた。そしてまもなく高商部卒業生は高等学校・大学予科と同等以上であると指定され、1927年には、商業英語・商事要項・簿記につき、実業学校教員無試験検定を受ける資格があるとして認可を受けることになったという(前掲『同志社百年史一通史篇二』1034頁)。このような経過を考慮すれば、高等商業学校は高等教育機関への予備的性格は持たず、それ自体で完結性を持っていたと考えるべきであろう。つまり台湾留学生は実業的指向がかなり強く、卒業後は上級学校に進学しないで、そのまま帰国した率が多かったと推測される。

大学入学前の学歴について

学籍簿に記載されている大学入学者の学歴を見ると、同志社中学(同志社普通学校など)の卒業生が120名いて25.8%を占めていることが目を引く。その国別の内訳をみれば朝鮮が37名(30.8%)、台湾80名(66.6%)、中国3名(2.5%)となっていて、留学生全体の比率からいっても、台湾留学生の同志社中学卒業生の比率の高さが極端に目立っている。したがって、同志社における留学生の実態を考察する場合に、同志社中学の在籍状況の調査を抜

きに考えることができないことがわかってくる。そこで、現在同志社高校に保管されているかつての同志社中学関係の学籍簿を閲覧する必要に迫られたが、ここでも関係機関の好意的配慮を得ることができた。

5. 同志社中学における留学生の実態

調査を続行してみて意外だったのは、大学関係をはるかに超える留学生が存在していることであった。図3で見ると、同志社中学の留学生総数は総計832名を数え（ハワイやアメリカ留学生の若干名を除く）、大学関係の2倍に迫り、その内訳を見ると中国37名（4.4%）、朝鮮248名（29.7%）、台湾547名（65.7%）で、台湾留学生が他を圧倒していることがわかる。同様に、中学卒業者の比率を見てみると、卒業生総数390名のうち、中国は11名（卒業率29.7%）、朝鮮は74名（卒業率29.8%）、台湾は305名（卒業率55.7%）となり、卒業生数及び卒業率ともに台湾が高い数字を示していることがわかる。さらに入学者数の年度別推移を図4で見れば、台湾留学生は比較的コンスタンスに増減しているが、朝鮮の場合には1920年から本格的に増加し、1929年にピークに達していることがわかる。また、台湾の場合には、1939年以後極端な落ち込みを示していることも特徴的といえる。

図3：同志社中学における留学生

統計832名（中国37名、朝鮮248名、台湾547名）

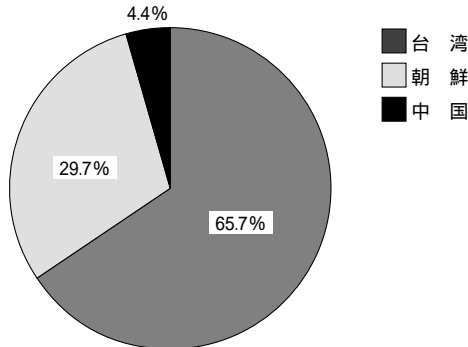
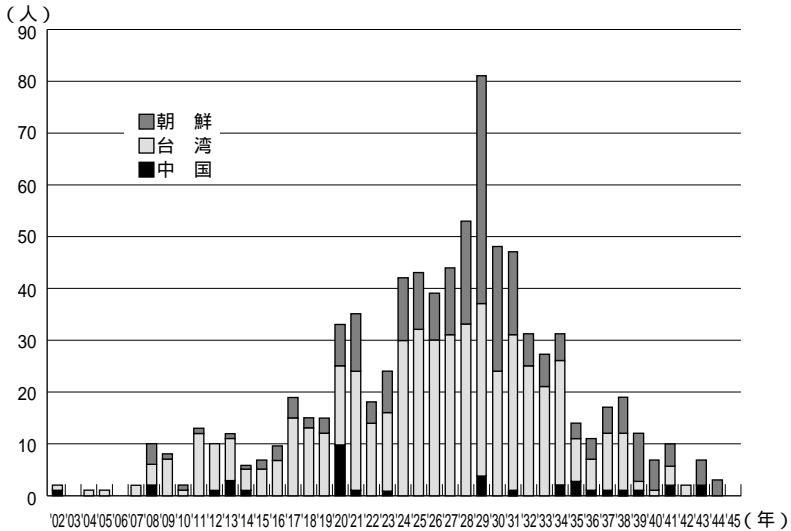


図 4：同志社中学における留学生の推移



クラスにおける留学生の比率

ところで、同志社中学の各クラスにおいて、留学生はどれくらいの比率だったろうか。ここに1930年度の卒業クラスの学籍簿に添付されていた、クラス人数・担当教員表に出身地の記載があるので、それをもとに再現してみたい(ただし氏名と県名は略)。

同志社中学のクラス構成 (1930年度卒業生)

第5学年甲組 (46名) 司級教師：清水永明 日本 (40)、台湾 (5)、朝鮮 (1)、中国 (0)
第5学年乙組 (42名) 司級教師：野村仁作 日本 (34)、台湾 (8)、朝鮮 (0)、中国 (0)
第5学年丙組 (44名) 司級教師：福井大三郎 日本 (30)、台湾 (10)、朝鮮 (4)、中国 (0)

第5学年丁組（28名） 司級教師：塩瀬千治
日本（21）台湾（5）朝鮮（2）中国（0）

1930年度の卒業生は4クラスで160名であったが、そのうち日本人学生は125名（78%）、台湾留学生は28名（17.5%）、朝鮮留学生は7名（4.4%）という割合である。このうち丙組を見てみると、留学生数がクラスの31.8%を占め、台湾留学生も同じく22.7%を占めていることになる。

1クラスの中に、3割を超える留学生が存在していることは、中学の各クラスにおける高い国際化状況（言語面の差異や異文化的現象は顕在化しなかったとはいえ）を示しているといえる。大量の留学生が台湾や朝鮮地域からやってきたのは、当該地域の教育・経済面に主要なファクターがあったが、受け入れ側の同志社中学にもそれなりの理由があったはずである。

同志社中学は、1896年に同志社尋常中学校（5年制）が創立されてから、同志社中学校（1899年）同志社普通学校（1900年）同志社中学（1916年）

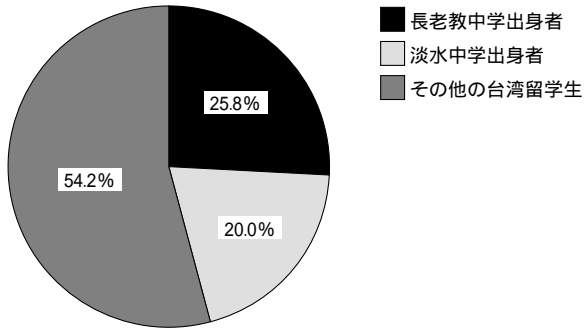
同志社中学校（1941年）と変遷を遂げるが、創立当初から公立中学との競争にさらされ、入学者の減少と徴兵令による退学者の増加に悩まされ、厳しい財政状況のもとにあった。だが1920年代に入ると生徒数は増加しはじめ、それにつれて定員も750名（1918年）、800名（1921年）、900名（1922年）、1000名（1923年）というように増加している。1910年代の同志社大学の学生定員は700名程度だったから、中学の同志社内における財政的比重がいかに大きかったかがわかる（前掲『同志社百年史 通史篇一』510～549頁）。同志社中学が留学生を積極的に受け入れたのは、生徒数の確保も大きな要因だったろうが、昭和の軍国主義的風潮のなかで、他の中学校に比べて、排他的でなく、自由・平等な校風が魅力的であったとの留学生の証言もあり、それは恐らく事実であったろう。

台湾留学生における入学前学歴の特徴

さて同志社中学の留学生の実態をさぐっていくと、もうひとつ興味深い傾向が存在することに気がつく。それは入学前の学歴を見ると、台湾留学生で

図5：同志社中学における台湾留學生の入学前学歴

統計547名（長老教中学141名、淡水中学110名）



は長老教中学と淡水中学の出身者がきわだっていることであり、両中学出身者の総数は251名（台湾留學生総数の45.9%）を占め、台湾の公学校出身者84名を遙かに凌駕しているのである（図5参照）。

だがよく考えてみると、本来台湾の教育制度から見れば、台湾の公学校を卒業してから内地の中学に留学するのが自然なコースであるはずで、台湾の中学から内地の同志社中学に入学（当然全員が編入学となる）するとは奇妙な現象でもある。そもそも台湾では、1898年7月に台湾公学校令が出されると、それまでの伝習所が廃止されて公学校が設置されることになる。公学校規則によると「公学校八本島人ノ子弟二徳教ヲ施シ実学ヲ授ケテ国民タルノ性格ヲ養成シ同時二国語二精通セシムルヲ以テ本旨トス」とあり、生徒の年齢は8歳以上14歳以下で、教科は修身・国語作文・読書・習字・算術・唱歌・体操であり、修業年限は6年であった。公学校では日本語によって日本語を教え、台湾語を一切介在させない方法が採用され、1926年には743校、児童数238,768人、就学率は29.5%に達したといわれている（近藤純子『戦前台湾における日本語教育』『講座日本語と日本語教育』明治書院1991参照）。その後公学校に継続する中等教育機関として、高等普通学校・女子高等普通学校や農林専門学校、商業専門学校なども整備され門戸が広げられるが、公立中学の場合には日本人子弟を優先したために、台湾の富裕層の子弟の多くは長老教中学や淡水中学などの私立中学へ入学することになったという。台

湾の私立中学から同志社中学への編入学が多いということは、台湾の公立中学と私立中学の間にあった大きな格差という特殊的要因が作用していたのである。

さて話を同志社中学における台湾の両中学からの編入学の実態にもどしてみると、長老教中学出身者総数は141名（台湾留学生中の比率25.8%）であるが、いっぽう淡水中学出身者総数は110名（台湾留学生中の比率20.0%）となり、長老教中学出身者のほうが5%ほど高い比率を示している。その年次別推移を図6、表2で見ると、1924年から増加し、1933年をピークとして10年ほど継続するが、1940年で突然停止する傾向が一目瞭然となる。

図6：同志社中学における長老教・淡水中学出身者数の推移

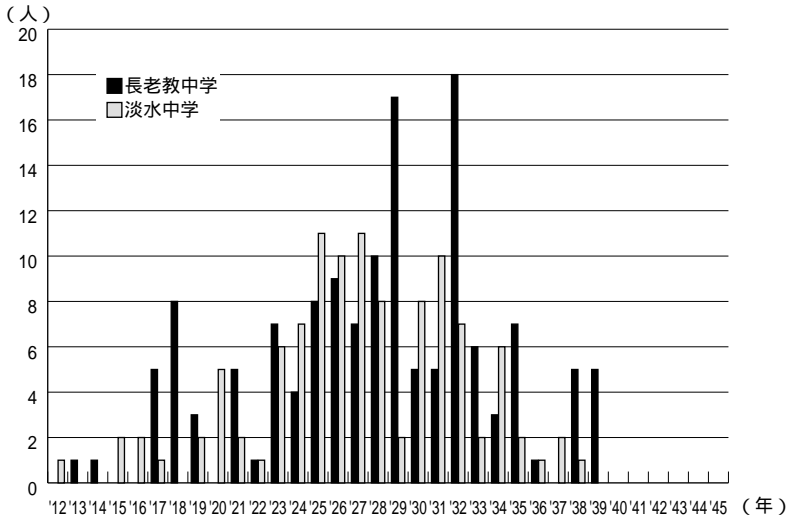


表2：同志社中学における長老教・淡水中学の年度別出身者数

	1912	1913	1914	1915	1916	1917	1918	1919	1920	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928
長老教	0	1	1	0	0	5	8	3	0	5	1	7	4	8	9	7	10
淡水	1	0	0	2	2	1	0	2	5	2	1	6	7	11	10	11	8
	1929	1930	1931	1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938	1939	1940	1941	1942	1943	1944	1945
長老教	17	5	5	18	6	3	7	1	0	5	5	0	0	0	0	0	0
淡水	2	8	10	7	2	6	2	1	2	1	0	0	0	0	0	0	0

6. 台湾側から資料的裏付けをさぐる

長老教中学と淡水中学における生徒数

ここで少し視点を変えて、長老教中学（現在は私立長栄高級中学）と淡水中学（現在は私立淡江高級中学）から見ればどうなるだろうか。つまり両校の在籍者数がどれくらいで、どのくらいの比率の生徒が同志社中学にやってきたのかを見ることはできないだろうか。幸い両校には校友会名簿（『桃李争栄 私立淡江高級中学校校友名冊』私立淡江高級中学校校友会 1989年3月、『私立長栄中学校校友芳名録』私立長栄中学 1955年12月）があって、年次別卒

図7：長老教・淡水中学における生徒数の推移

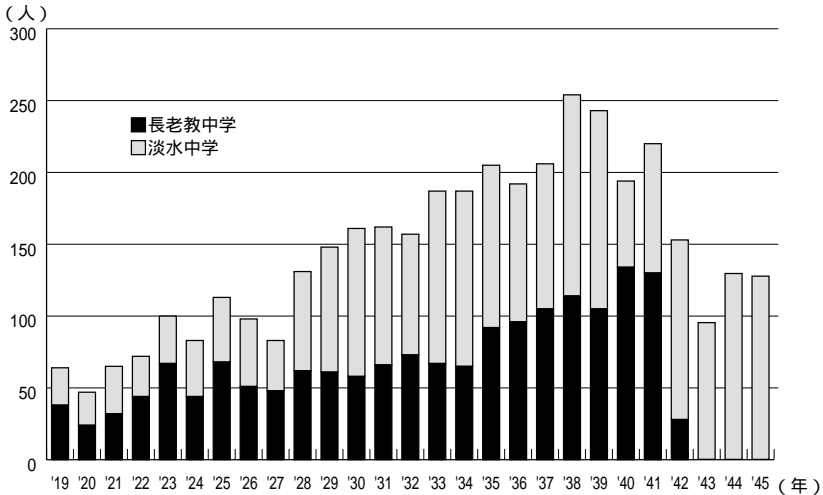


表3：長老教・淡水中学の年度別生徒数

	1919	1920	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	1931	1932	1933	1934	1935	1936
長老教	38	24	32	44	67	44	68	51	48	62	61	58	66	73	67	65	92	96
淡水	26	23	33	28	33	39	45	47	35	69	87	103	96	84	120	122	113	96

	1937	1938	1939	1940	1941	1942	1943	1944	1945
長老教	105	114	105	134	130	28	0	0	0
淡水	101	140	138	60	90	125	95	131	130

注：長老教中学の1942年以降の生徒数については依拠した資料が古く、別の資料によって更に精査する必要がある。

業者・入学者がリストされているので、それをもとに図7と表3を作成してみた（両校では基準が若干異なるので補正した）。それによると長老教中学と淡水中学の生徒数は、1920年代初期にはともに20～30名だったが、20年代後半からは50名を突破し、さらに30年代にはいると100名を超えるのが常態となっている。両者の差は40年代に入ってから明確となり、長老教中学の場合には1941年を境に生徒数は激減するが、淡水中学は、1940年にいったん減少し、その後また100名台へと復活して1945年に至っているのである（その原因は淡水中学が経営権を台湾当局に接收されるなかで再建をめざしたのに対し、長老教中学は、経営権を返上しないで再建をめざしたという当局に対する対応の違いにあった可能性がある）。そしてこの生徒数の変化は、両校の同志社中学への留学生の増加とほぼ見合っていることがわかる。次に両校の生徒がどれくらいの比率で同志社中学にやってきたのかを見ると、時期によってばらつきがあるが、たとえば1926年時点では、長老教中学では在籍者数の18%（9/51）、淡水中学では21%（10/47）という高率の生徒が同志社中学にやってきていることがわかる。ただ、これを正確に比較するには台湾の中学での中途退学の問題を取り上げる必要があるだろう。

淡水中学に見る卒業生と修業生の比率（編入学の問題）

同志社中学への編入学者が多かったのは、台湾から言えば、私立中学において中途退学が多かったことを意味する。この中途退学者は台湾では卒業生ではなく修業性として取り扱われているので、ここで両中学の卒業生と修業生の比率を調べる必要があるのだが、現在までの調査では長老教中学のほうで関係資料を見つけることができなかつたため、淡水中学の例で示してみることとする（前掲『桃李争栄 私立淡江高級中学校友名冊』）。図8と表4を見てみると、次のことがわかってくる。ひとつは、生徒規模の増加にもかかわらず、卒業生数は一桁で推移し、増加のほとんどは修学生になっていることである。極端なケースだが1934年の場合では、卒業生は全体の6.6%（8/114）にすぎないことになり、4～5年次のクラスではほとんど在籍者がいないという異常な状況にあったのである。1919年～1938年をとってみると、平均して9.1%の修学生が同志社中学に編入したことになり（104名/1138名）

図 8 : 淡水中学における卒業生と修業生の推移

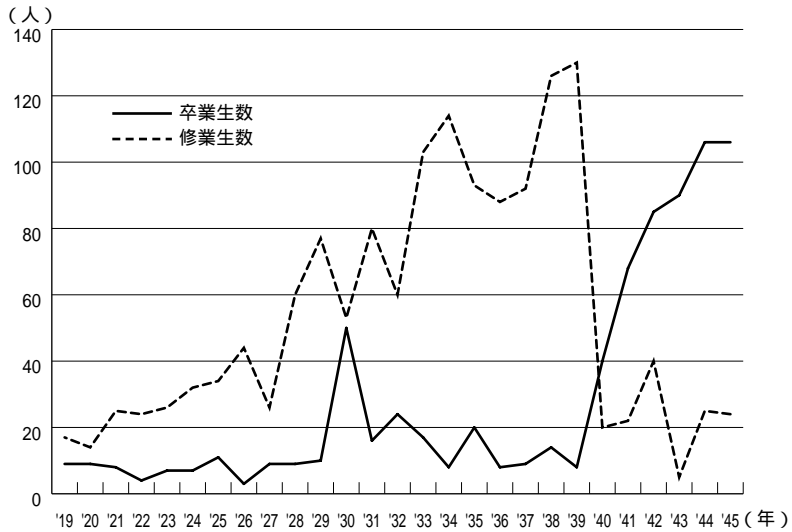


表 4 : 淡水中学における卒業生と修業生の年度別生徒数

	1919	1920	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	1931	1932	1933	1934	1935	1936
卒業	9	9	8	4	7	7	11	3	9	9	10	50	16	24	17	8	20	8
修業	17	14	25	24	26	32	34	44	26	60	77	53	80	60	103	114	93	88

	1937	1938	1939	1940	1941	1942	1943	1944	1945
卒業	9	14	8	40	68	85	90	106	106
修業	92	126	130	20	22	40	5	25	24

1919年～1945年総生徒数

1919年～1939年（未認定時期）	1940年～1945年（認定時期）
在学者数合計 1,578名	在学者数合計 631名
卒業者数合計 260名（全体に占める比率 16.5%）	卒業者数合計 495名（全体に占める比率 78.4%）
修業者数合計 1,318名（全体に占める比率 83.5%）	修業者数合計 136名（全体に占める比率 21.6%）

比率が最高であった1927年の例をとると、42.3%（11/26）もの生徒が同志社中学へ編入学したことになる。同志社中学編入生以外の、残りの9割の修学生が日本や台湾のほかの中学へ系統的に送り込まれていたかどうかは更に追跡調査が必要だが、少なくとも同志社中学が修業生受け入れのルートのみ

とつを形成していたことは事実であろう。そしてこの傾向は長老教中学でも変わらなかった（その原因は台湾当局の教育政策にあったから）と十分に推測することが可能である。

もう一つ、この図表からもうひとつ重要な事実を分析することができる。それは、卒業生と修学生の比率が1940年を境に逆転していることで、ここでの修学生の減少は、同志社中学への編入学の減少と関係があるのだろうか。

ここに実は、台湾留学生が朝鮮とは異なる条件をかかえていたことが関わっているのである。それは中学の認定（認可）問題の存在である。もともと台湾の公立中学は日本人子弟を主として受け入れ、そのために比較的裕福な台湾人子弟の多くは私立中学に進学せざるを得なくなったが、厳しい条件（日本人を校長にすること、10万円以上の基金を準備することなど）により認定をクリアできなかった私立中学の卒業生は、卒業後に上級学校受験の資格を得ることができなかった。それで上級学校進学希望者は、2年次あるいは3年次時点で、内地の中学などに編入する必要に迫られたのである。だが、1938年に台湾総督府が教育法令を改正し、両中学を認定したことにより、他の中学に編入する必要性を失ったのである。1940年時点で卒業生と修業生の比率が逆転しているのはそのためであるし、同志社中学への編入生が2年後の1940年以後ゼロになっていることも、この認定問題が直接的原因であったことがわかる。要するに淡水中学の卒業生名簿に見える大量の修業生の存在は、いわゆる落ちこぼれの中途退学ではなくて、上級学校への進学希望者の一群であったことは確かである。

長老教中学からの留学生に関する進路追跡調査

台湾から同志社中学にやってきた多くの留学生が、卒業後にどのように進路を選択したのだろうか、その実態を正確に捉えることはできないが、長老教中学の名簿（前掲『私立長栄中学校友芳名録』）には、卒業生の出身学校や帰台後の職業などが、分かる範囲で記載されている。私が作成した同志社の台湾留学生リストとつきあわせてみると、かなりの数の留学生の学業ルートを不完全ながら再構成することが可能となる。今追跡調査の結果得た41の事例を以下に示してみる（ただし、中学以外の出身校名については「芳名録」

記載のままとした)。

- (1)張基全(1897.4.10生):長老教中学入学(1911) 同志社中学退学
(1916.4~1919.3) 九州帝国大学卒業
- (2)林安生(1899.9.4生):長老教中学入学(1912) 同志社中学卒業
(1918.4~1921.3) 名古屋医大卒業 医師
- (3)莊加善(1901.5.5生):長老教中学入学(1914) 桃山中学(不明)
同志社大学法学部入学(1922.4) 愛知医大卒業 医師
- (4)高天成(1904.12.12生):長老教中学入学(1915) 同志社中学卒業
(1917.4~1921.3) 東京帝大卒業(医学博士) 医師
- (5)陳嘉音(1904.3.27生):長老教中学入学(1917) 同志社中学退学
(1921.9~1922.11) 名古屋医大(医学博士)卒業 省立台北病院長
- (6)吳進益(1903.11.19生):長老教中学入学(1918) 同志社中学退学
(1921.9~1922.4) 名古屋大学卒業 医師
- (7)黃進元(1903.2.22生):長老教中学入学(1918) 同志社中学退学
(1922.9~1923.3) 同志社大学法学部入学(1924.4)
- (8)周約典(1904.6.18生):長老教中学入学(1919) 同志社中学退学
(1921.4~1923.3) 日本齒科卒業 齒科医
- (9)洪大中(1902.9.24生):長老教中学入学(1919) 同志社中学退学
(1923.4~1924.4) 東京医專卒業 医師
- (10)趙榮讓(1906.9.29生):長老教中学入学(1920) 同志社中学退学
(1923.4~1924.4) 明治薬專卒業 薬劑師
- (11)廬茂川(1908.4.5生):長老教中学入学(1920) 同志社中学卒業
(1923.9~1926.3) 千葉医大薬学卒業 貿易業
- (12)許着信(1907.2.8生):長老教中学入学(1921) 京都中学校(時期不明)
同志社中学卒業(1924.4~1926.3) 大阪齒專卒業 篤信齒科医院
- (13)黃演淮(1906.3.15生):長老教中学入学(1921) 同志社中学卒業
(1925.9~1927.3) 同志社専門学校入学(1927.4) 台中家職校長

- (14)沈水雲(1910.1.6生):長老教中学入学(1923) 同志社中学卒業
(1925.4~1928.3) 長崎医大卒業 医師
- (15)張林叔昌(1907.5.22生):長老教中学入学(1923) 同志社中学卒業
(1925.4~1928.3) 桐生高工卒業 鉄工廠経営
- (16)吳新居(1910.6.4生):長老教中学入学(1924) 青山学院中学部
(時期不明) 同志社大学法学部予科1部(1930.4)
- (17)林金殿(1910.4.26生):長老教中学入学(1924) 同志社中学入学
(時期不明) 同志社高等商業部入学(1930.4) 九州帝大卒業
台北市府秘書
- (18)林敬章(王)(1909.12.17生):長老教中学入学(1924) 同志社中学
退学(1928.4~1929.5) 日大芸術科卒業 中英製紙總經理
- (19)陳坤源(1810.11.5生):長老教中学入学(1924) 同志社中学卒業
(1927.4~1929.3) 日本大学医学部卒業 医師
- (20)黃演馨(1910.6.25生):長老教中学入学(1924) 同志社中学卒業
(1925.4~1927.3) 同志社大学法学部予科1部入学(1931.4) 立
教大学卒業 銀行員
- (21)李応堂(1910.10.6生):長老教中学入学(1925) 同志社中学退学
(1928.4~1930.4) 同志社大学法学部予科1部入学(1930.4) 同
志社大学経済学部卒業(時期不明)
- (22)蔡森栄(1910.6.6生):長老教中学入学(1925) 同志社中学卒業
(1928.4~1930.3) 同志社高商入学(1930.4)
- (23)蕭仁慈(1910.11.26生):長老教中学入学(1925) 同志社中学退学
(1928.4~1929.4) 同志社大学法学部入学(1929.4) 長栄女子
中学
- (24)彭明德(牧山泰三)(1913.10.6生):長老教中学入学(1927) 両洋
中学卒業(時期不明) 同志社専門学校政治経済部入学(1934.4)
同志社大学法学部入学(1940.4) 光華女中
- (25)曾武琴(1912.7.11生):長老教中学入学(1928) 同志社中学卒業
(1929.4~1933.3) 同志社大学予科2部入学(1934.4) 昭和医
専卒業 旗山医院

- (26)吳基福(1916.10.12生)：長老教中学入学(1929) 同志社中学卒業
(1932.4~1934.3) 日本医大卒業(医学博士) 基福眼科医院
- (27)邱主生(1913.12.22生)：長老教中学入学(1929) 同志社中学卒業
(1932.4~1934.3) 日本齒医卒業 齒科医
- (28)林慶瑞(1913.9.11生)：長老教中学入学(1929) 同志社中学卒業
(1932.4~1934.3) 日大經濟科卒業 台南県政府工商課
- (29)張尚勳(1915.5.10生)：長老教中学入学(1929) 同志社中学卒業
(1932.4~1934.3) 日本齒科卒業 齒科医
- (30)吳基生(1916.10.12生)：長老教中学入学(1930) 同志社中学卒業
(1933.4~1935.3) 東京齒科卒業(齒医博士) 旗山病院長
- (31)周慶淵(1914.12.19生)：長老教中学入学(1930) 同志社中学中退
(1932.4~1934.3) 同志社大学予科1部入学(1934.4) 上野音楽学校卒業
- (32)蕭振声(1913.9.9生)：長老教中学入学(1930) 同志社中学卒業
(1932.8~1935.3) 日本齒科卒業 清妙齒科診療所
- (33)林克恭(1916.11.20生)：長老教中学入学(1931) 同志社中学退学
(1932.8~1935.3) 早大卒業
- (34)羅応時(1917.7.3生)：長老教中学入学(1931) 同志社中学卒業
(1934.4~1936.3) 同志社高商入学(1936.4)
- (35)王共(1919.10.5生)：長老教中学入学(1932) 同志社中学卒業
(1935.4~1937.3) 名古屋薬専卒業 台南1中(薬剂師)
- (36)吳瑞卿(1917.7.14生)：長老教中学入学(1932) 同志社中学卒業
(1935.4~1937.3) 明大卒業 北投第1銀
- (37)張鴻麟(1917.9.28生)：長老教中学入学(1932) 同志社中学卒業
(1935.4~1937.3) 九州医専卒業 医師
- (38)賴日生(1920.2.9生)：長老教中学入学(1932) 同志社中学卒業
(1935.4~1937.3) 東亜医学院卒業 医師
- (39)郭炳堂(1918.3.15生)：長老教中学入学(1934) 同志社中学卒業
(1935.4~1938.3) 東亜医学院卒業 医師
- (40)洪学優(1922.1.1生)：長老教中学入学(1935) 同志社中学卒業

- (1938. 9 ~ 1940. 3) 東大経済科卒業
 (41)陳峻徳 (1914.10.28生) : 長老教中学入学 (1935 ?) 同志社中学卒業
 (時期不明) 同志社専門学校英語師範入学 (1934. 4) 同志社高商
 入学 (1935. 4) 東京医専卒業 医師

上の例からわかることは、長老教中学からの同志社中学への留学生の多くは、卒業後に全国の高等教育機関へ進学しており、そのうち医科・薬学・歯科が58% (23名) を占めていることである。また最終学歴で同志社大学 (高等商業学校を含む) となるものも15% (6名) と比較的高率であることも指摘できるだろう。こうして、長老教中学 同志社中学 医学関係学校 医師という、一つの典型的な進路コースの存在を指摘することができるのである。ただ医学関係進学者が多いという点については、特に同志社中学だけの問題ではなくて、長老教中学卒業生名簿からも同じ傾向を読みとることができ、恐らく台湾留学生全体の指向とも一致するはずである。こう見てくると、台湾留学生が多く選択した同志社高等商業学校というコース(すでに指摘した)と、同志社中学 医学関係の学校とコースと、つまり医師か商業従事者という2極構造を取っていたことも指摘できるのである。長老教中学在校生をはじめとする比較的裕福な台湾家庭の子弟は、日本の厳しい差別的構造のなかで、相対的に自由な活動が可能であった自由業 医師と商業に選択の目を向けたと考えたほうが自然であろう。いわば同志社中学は、台湾留学生の最初の上陸地点であり、彼らの多くはそこを拠点に全国に散っていったことになる。このようにして、台湾留学生の学歴経過点としての同志社中学は、彼らの最終学歴に記載されることもなかったのである。

7. 同志社における留学生の全体的なまとめ

同志社中学における留学生状況の分析をうけて、ここで同志社全体におけるアジア留学生の状況と、台湾留学生の位置についてまとめておきたい(女子専門学校と高等女学部については取り扱っていない)。前章で整理した同志社中学の留学生を合わせると、同志社全体におけるアジア留学生総数は総計1,298名に及び、国別では、図9で見るように、中国51名(3.9%)、朝鮮

図 9：同志社全体における留学生数
 統計1,298名（中国51名、朝鮮573名、台湾674名）

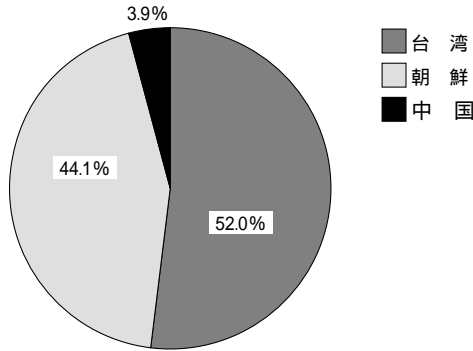


図10：同志社全体における年度別留学生の推移

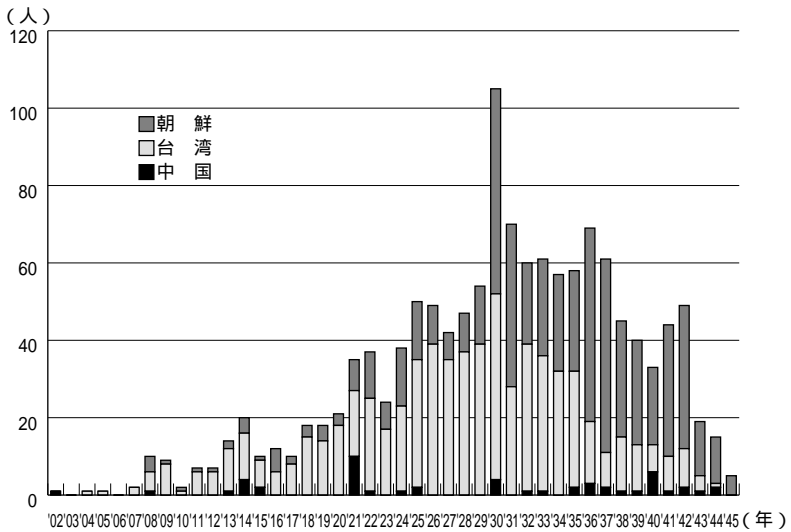


表 5：戦前同志社全体における年度別留学生数

	1902	1903	1904	1905	1906	1907	1908	1909	1910	1911	1912	1913	1914	1915	1916	1917	1918	1919
中国	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	4	2	0	0	0	0
朝鮮	0	0	0	0	0	0	4	1	1	1	1	2	4	1	6	2	3	4
台湾	0	0	1	1	0	2	5	8	1	6	6	11	12	7	6	8	15	14

	1920	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	1931	1932	1933	1934	1935	1936	1937
中国	0	10	1	0	1	2	0	0	0	0	4	0	1	1	0	2	3	2
朝鮮	3	8	12	7	15	15	10	7	10	15	53	42	21	25	25	26	50	50
台湾	18	17	24	17	22	33	39	35	37	39	48	28	38	35	32	30	16	9

	1938	1939	1940	1941	1942	1943	1944	1945	合計
中国	1	1	6	1	2	1	2	0	51
朝鮮	30	27	20	34	37	14	12	5	573
台湾	14	12	7	9	10	4	1	0	674

573名（44.0%）、台湾674名（51.8%）となる。また留学生数の年度別推移は図10、表5でわかるように、1921年あたりから増加し、1930年をピークとして30年代末まで高水準を維持している。台湾留学生はそのうちの過半数を占めているが、その理由は同志社中学在籍者が多いことによるし、朝鮮留学生の場合には予科2部の入学者数にその多くをたよっている。

一方、大学関係の台湾留学生を中心に考えて見ると次のことが指摘できるだろう。一つは同志社中学から同志社大学への進学率が高いこと、二つは神学科等への入学が朝鮮よりも格段に少ないこと、三つは高等商業学校への入学者が多いことである。同志社中学の台湾留学生においては、長老教中学と淡水中学という2つの中学からの組織的編入学と見られる現象が特に注目される。

台湾の学生が日本に留学する際の、最初の上陸拠点（経由地）として選んだのが同志社中学であったことは疑いが無い。だとすると多くの日本の学校のなかでなぜ同志社中学が選ばれたかが、次の問題となるだろう。同志社中学・長老教中学・淡水中学3校の共通項はキリスト教であるが、その影響は直接的ではない。幾人かの台湾の同志社卒業生にその理由をたずねたが、異口同音に先輩の存在と教師の助言という二つの要素があがってきた。先輩と教員という角度から、同志社と台湾の文化教育関係をさぐっていく必要があるだろう。

Prewar Doshisha and Taiwanese Students

Sakaguchi NAOKI

Key words: DOSHISHA, TAIWAN, FOREIGN STUDENTS

There were many Asian students studying at Doshisha before the war. The real situation, however, has not been made clear so far. The purpose of this work was to investigate the school registers of Doshisha and confirm the total numbers and ratios of Chinese, Korean and Taiwanese students there. Another main aim is, especially by focusing on Taiwanese students, to clarify their actual circumstances. As a result of this investigation, it has been possible to show that a great many Taiwanese students entered institutions of higher education all over Japan through Doshisha.